

FFG調査月報の姉妹誌「ながさき経済」を発刊している、ふくおかフィナンシャルグループの長崎経済研究所。長崎の旬な情報を提供するコーナー「長崎だより」の今月号は、合同会社フラットアワー 代表社員 錢本慧様に「漁業はもっと面白くなる」と題し、寄稿していただきました。

長崎経済研究所による「ながさき経済web」がスタート!

当研究所が発信する最新の情報をメールでお届けします。
メールマガジンの登録はこちら▶



ながさき経済web画面

お問い合わせ

株式会社長崎経済研究所
長崎市銅座町1番11号
十八親和銀行本店内
TEL095-828-8859



長崎経済研究所とは

長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活のお役に立つ情報をご提供するとともに、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しております。





漁業はもっと面白くなる

寄稿 銭本 慧



PROFILE

合同会社フラットアワー 代表社員 ^{ぜに} 銭 ^{もと} 本 ^{けい} 慧



1984年、大阪府吹田市生まれ、兵庫県明石市育ち。東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻博士後期課程修了（環境学博士）。長崎大学において日本学術振興会特別研究員（PD）を経て、2015年4月に対馬に移住。2016年4月に合同会社フラットアワーを設立（代表社員）。同じく水産学者の須崎寛和氏を招き寄せ、持続可能な水産業の実現のために、高品質高付加価値の魚介類販売、ブルーツーリズム、研究コーディネート等に取り組んでいる。



はじめに

皆さん、はじめまして。長崎県の国境離島・対馬で一本釣り漁を行っております、銭本慧と申します。もともと対馬の出身というわけではなく、前職は水産や海洋の研究をする研究員でした。一念発起して2015年にIターンで対馬に移住し、2016年に「持続可能な漁業の実



漁業体験の前後で、漁法の特徴や注意点などをプレゼン形式でレクチャー

現」をミッションとした合同会社フラットアワーを起業しました。現在、社員3名、パートナーさん3名で新しい沿岸漁業のあり方を模索しております。起業当時はそれほどなかったのですが、現在、ビジネスシーンにおいて「持続可能性（サステナビリティ）」の視点がますます重要になっていると感じております。私たちの事業自体は特定分野の小規模なものです。創業当時から持続可能性を考えて経営してきましたので、読者の皆様の参考になるかもしれないと思い、筆を執らせていただきました。

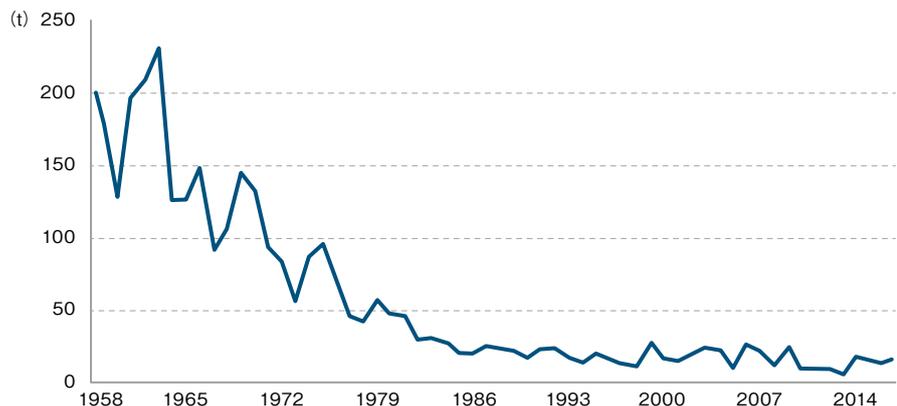
研究を通して 水産の危機を実感

私は兵庫県の明石出身で、父親の影響で幼い頃から釣りが大好きになったことがきっかけで、海や魚の勉強をしたと思います。長崎大学水産学部に入學しました。その後、さらに研

究を続けるために東京大学の大学院に進学し、研究活動を行ってまいりました。「海洋環境の変化によって海の魚の量（資源量）がどのくらい変動するか」という視点で研究を行っており、対象魚種は「ニホンウナギ」をテーマにしていました。ニホンウナギは日本を含めた東アジアに広く分布していますが、その産卵場は数千キロも離れたグアムの近くにあり、そこで生まれた仔魚は海流に乗って大回遊を行い、分布域まで輸送されるため、海流や水温などの海洋環境の変化の影響を受けやすいのではないかと考え、ニホンウナギを研究の対象種にしました。

当初は、ニホンウナギの資源量の変動（図1）は海洋環境の変動によって大まかに説明がつくのではないかと考えていました。しかし、いざ解析してみると、確かに海洋環境の変動の影響を受けているけれど、他の要因も多大に影響しているそうであることがわか

図1 シラスウナギ
国内採捕量の推移





漁業、釣り体験では、お子さんや女性も安心して楽しんでもらえます

りました。その頃からニホンウナギだけでなく、他の魚種についても興味を持ち勉強してみたのですが、共通して、人間活動、特に漁業による過剰な漁獲によって、長期的に資源量が減少しているように思えました。日本周辺の海は世界的に見ても非常に生産性が高い海域です。生産性が高いというのは銀行で言えば金利が高いという

ことです。十分な親が海にいて、漁獲制限などの資源管理をして獲り残せば、増えた利息だけで漁業は豊かに回るはずですが、過去においては獲りたいだけ獲る漁業で元金に手をつけてしまった結果、得られる利息を減らしてしまいました。まずはその元金を増やさないといけない。科学的なデータをもとに、獲る量を制限し、

十分な親が残っている海を維持するという思考がこれからの漁業には必要だろうと思いました。

どうすれば漁業は魅力的になる??

研究自体は楽しかったのですが、これからも私たちが魚を食べ続けるた

めに何をすべきかを考えたときに、根っからの釣りバカということもあり、私は漁業そのものに関わってみて、という気持ちが強くなりました。そこで、漁業が基幹産業といえる地域を5〜6カ所ほど回り「いなサバ」としてブランド化しているマサバの本釣り漁に同行し、その大きさと美味しさに感動した対馬の伊奈地区を



忘れられず、移住先を長崎県・対馬にする決断をいたしました。2015年4月に対馬に移住、中間支援組織に就職し、平日は会社の仕事、休日は漁師の手伝いを行いながら、漁師コミュニティに入っていました。

最初の1年の間に、使われていない船を譲っていただけの幸運があり、伊奈漁業協同組合(漁協)の組合員にもなったので、漁師としてスタートする準備ができました。ただ、1人で活動するのも心細かったので、研究者時代の後輩、須崎寛和を口説いて、2016年4月に2人で「合同会社フラットアワー」を起業しました。

弊社のミッションは「持続可能な漁業の実現」です。漁業といっても様々な形態がありますが、私たちは沿岸漁業で一本釣り漁をメ

インにしており、この分野で持続可能なスタイルを創っていきたくと考えています。特に大切にしている方向性が3つあります。1つ目は過剰な漁獲を行わない、海洋資源の持続性を考えることです。研究時代から、海

の資源量が過剰漁獲によって減少していると考えていたため、獲りたいだけ獲るのではなく、獲る量を抑えつつ、獲った一匹の価値を高める漁業を目指しています。2つ目は、若者が就きたいような働き方に変えていく、人の持続性を考えること

です。漁業、特に沿岸漁業では家族経営で、息子が後を継ぐ形で就労人口が維持されてきました。しかし、漁業を取り巻く環境の悪化と他の産業の成長により、相対的に漁業の魅力が小さく感じられて後継者が少なくなっているのが現状とされています。一方で、漁業に従事しているからこそ味わえる魅力があることも確かなので、若者がチャレンジしてみたいと思えるような仕事にしていくことを考えています。3つ目は、最終的に魚を

召し上がる消費者・生活者の方々が、漁業への関心を強め、より良い産業にしていくお手伝いをしてもらえるような状態をセットすることです。具体的には、SNSなどインターネットで漁業現場の情報を高頻度に発信して、見ていただいたり、共感できる内容についてシェアしていただくことや、生産者から直接購入できるような取り組みも重要です。また、環境に配慮した獲り方であると第三者機関から認定を受け、エコラベル付きの魚として流通させることも大事だと考えています。

現在の事業内容

このような視点から、弊社では既存流通に頼るだけではなく、私たちのネット発信を見て共感してくださった飲食店や個人のお客様に直接魚を販売する直販業を行ってきました。魚を獲る能力もままならず、お客



地域の方を交えて行う懇親会もインターンの醍醐味



一匹一匹魚の状態を確認し、お客様に発送しています

様も全くゼロからのスタートだったので、最初は苦勞の連続でした。それでも周りの漁師が釣り方を教えてくれて、少しずつ魚を獲れるようになり、その様子を毎日SNS発信することで問い合わせが出てきて、少しずつ取引量を増やしていくことができております。何より、直接繋がったお客様から喜びの声が届いてくるのが嬉しく、やりがいを感じております。時にはお叱りを受けることもあるのですが、その声を受けて鮮度保持の仕方を改善したり、加工場など設備投資をして使いやすいうように加工することで、お客様の満足度の向上を実感できるようになりました。

私たちの試行錯誤の連続のような活動は、何かを変えないといけないけれど何をしたいか、何からしたらいいか考えている他の生産現場の方々や、漁業に関心があるけれど、どのようにアプローチすれば良いか考えている方々の参考にもなるかもし



鮮魚BOXの一例 魚の鮮度が保持されるよう、梱包も気をつけています

れません。弊社では創業2年目からそのような方を対象に視察やインターンを積極的に受け入れております。現在までに視察やインターンの経験者は50名を超えますがその中から、弊社に入社してくれた社員がいたり、対馬を気に入って移住してくれたり、移住者がいたり、別の地域で漁業者になる方も数名出てきました。弊社のミッションを考えた時には、漁業や直販などの事業を拡大することよ

りも、現在の水準を維持しつつ、インターンなどを通して、漁業に直接、または間接的にでも関わってくださる方を増やしていくことに経営資源を投じることが漁業を魅力的にしておく近道なのではないかと現在感じています。



地元の漁業者に漁業の魅力や課題をヒアリングするインターン生

2020年に”70年”ぶりに漁業法が改正され、日本の漁業全体でも漁獲量を規制し、資源管理を目指す方針が打ち出されました。ただでさえ衰退している漁業の現場で、漁獲量を制限するとさらに収益が悪化する

師も多いと思います。しかし、我慢して獲り控えれば、比較的短期間で海中の魚は大きく増えるとは私は信じています。国、地方自治体、漁業関係者、そして魚を召し上がる消費者の方々、皆で魅力ある持続可能な水産業を創り上げられることを夢見て、今から出港いたします！



加工場で出た残渣はコンポストで堆肥にし、米作りに利用しています